純粋志向の文学言説

――佐藤一英「純粋童話」の提唱とその周辺――

中根隆行

はじめに

一九二八（昭三）年発行の『文芸大辞典』には「純粋」という項目がある。そこには、「経験によらぬこと、経験に先行することを云ふ」とまず記され、カントに依拠した「先験的といふに同じい」であると書き添えられている。[*1] 平易には、まじりけのないことという意味で用いられる場合が多い「純粋」という語には、このような辞書的な意味に端を発するかのように、その指示内容の範疇までもがア・プリオリなものとして、曖昧な高尚性を示唆する一般的な了解事項として委ねられてしまう傾向がある。「純粋芸術」「純粋映画」「純正美術」「純文学」という具合に広く文芸用語に含まれるだろう言葉を挙げてみても、それは同様である。たとえば、「純文学」という語は、「純粋なる文学の意。小説、戯曲、詩歌等を指す」とか「ジャーナリズムの文芸などではなく、純粋の創作的動機から産れた文学」といった意味合いで使用され、[*2] そこからある種高尚な文学性を感じるのが一般的であるということは了承できるだろう。この語が指示するのは、あらゆる夾雑性を排する「純粋の創作的動機」によって生産され、それゆえに詩的性格を有する文学作品といった意味内容なのである。そこで問題にしたいのは、「純粋」なる語を発話することによって派生する力学、すなわち純粋志向の文学言説がもつ政治性である。

本稿でとりあげるのは、佐藤一英という詩人のおもに一九三〇年代の文学言説である。佐藤は、「純粋童話」というスローガンを旗印に『児童文学』という雑誌を主宰した人物でもある。もともとポーや三富朽葉、後にはヴァレリーや福士幸次郎などに影響を受けた古典派象徴詩人として知られていた彼は、早稲田大学高等予科時代に書いた「軽さと重さ――菊池寛への公開状」（『新潮』、一九一九年十一月）で直ちに菊池寛に注目され、その第一詩集『晴天』（江崎正文堂、一九二二年）は萩原朔太郎の目に留まるなどして、早くからその執筆活動は評価されていた。また、尋常高等小学校卒業直後に母校の代用教員となり小学校准訓導の免状を取得していることや、早稲田予科自主退学の後には中京高等女学校の教師として八年間教職に就いていたことからすれば、彼は、学校教育の実践者という履歴をもつ人物でもある。[*3]

一、「純粋童話」のスローガン

一九三一（昭六）年七月、学術教育に関する書籍を多く出していた文教書院という出版社から『児童文学』が創刊される。『詩と詩論』の体裁を擬した季刊誌として年四回の発行を掲げながらも翌年三月に第二冊を出すのみで中絶したその創刊号には、「見よ。この新鮮な、香気高い純粋童話の花園！」や「大人も読め。欝然たる童話文学のルネッサンス！」というような、やや過大広告的な帯文字が付されている。今日この雑誌は、当時ほとんど注目されていなかった宮沢賢治の「北守将軍と三人兄弟の医者」（第一冊）と「グスコーブドリの伝記」（第二冊）を掲載した功績から、後に児童文学史において評価されるにいたるのだが、管見のかぎり、同時代的にはあまり注目されなかったといってよい。だが、やがて文学領域において「文芸復興期」と称される同時代性から鑑みるに、帯文字にも冠されていた「純粋童話」という宣伝文句は、多分に論考の余地が残されているものと思われる。この雑誌『児童文学』を主宰した佐藤一英は、創刊号の「編輯後記」を以下のように始めている。

今日ジャアナリズムに乗つて跳ねてゐる童話を見るに凡そ卑俗主義的な範囲をいでない。ひるがへつて国語読本にとり入れられた文学を見るに、これらはもはや児童文学としての指導的な位置を保つだけの要素を欠いでゐるとより思へない。かくて前者は加速度的に猥雑化しつゝあり、後者は文学的飢渇に喘ぎつつある。このときこれらに代るものが現れないのをわれわれは不思議に思ふ。[*4]

『児童文学』創刊の辞ともいえるであろう「編輯後記」は、続けて槙本楠夫らによって提唱されていたプロレタリア児童文学でさえ「教化主義的童話」として「宣伝ビラか新聞記事以上にでるものではない」と排撃することで、この児童文学雑誌発刊の意義を高らかに主張している。関口安義氏が指摘しているように、[*5]「ジャアナリズムに乗つて跳ねてゐる童話」は『少年倶楽部』などの商業雑誌に掲載されていた童話を、「国語読本にとり入れられた文学」は『赤い鳥』などの「童心主義」に則った童話を指していると思われるのだが、だとすれば、佐藤一英は、当時の児童文学の主要な諸領域に対して反旗を翻したということになる。[*6]「卑俗主義」「猥雑化」「文学的飢渇」そして「教化主義」といった価値判断により既成の児童文学ジャンルを総ざらい批判する佐藤がここで、新たに「指導」的立場をとるべき児童文学を提唱している点は興味深い。そして掲げられるのが「純粋童話」というスローガンなのである。

このやうな童話界の現状は何に由来するか。いろいろな社会的事情があることは勿論だが、先づ児童を軽蔑することより始つてゐるものと思はれる。児童には文学的精神が欠けてゐるものだといふ観念が童話の供給者を支配してゐるとより思はれない。

われわれはかゝる観念を排撃する。かゝる観念を根底づけてゐる児童心理学を軽蔑する。そしてこの軽蔑からわれわれの

仕事の第一歩を踏み出す。

＊

純粋童話！
詩的童話！[*7]

佐藤一英が、大衆児童文学や国語読本そしてプロレタリア児童文学を認めない理由は、ここに端的に記されている。それら各分野の「童話の供給者」は、「児童」に「文学的精神」を見出していないその一点において、「軽蔑」の対象とされているのだ。しかし、読み手となるだろう「児童」が「文学的精神」を有する是非に関する議論は、「童話の供給者」側の植え付けた好ましき「児童」像の素描による相違でしかない。問題となるのは、佐藤一英の文学観であり、それに基づいて想定されたあるべき児童文学像であろう。同「編輯後記」には、掲載作品に既発表のものを含む理由として、「殊に純粋小説として発表されてゐてなほ児童文学としての条件をも備へてゐるやうな作品は多少古いものでも改めて紹介して行きたい」旨が記されている。ここから推察するに、「純粋童話」「詩的童話」と「純粋小説」とが、「純粋」なる語をキーワードとして佐藤の児童文学像のコンセプトのなかで重なり合っている点は看過すべきではないであろう。すでに冒頭で触れたとおり、「純粋童話」というスローガンに込められた意味も、まじりけのない、あらゆる夾雑物を排した「純文学」的な定義に類するものと考えられるからである。その児童文学像は、具体的な定義を伴わない、きわめて抽象的なスローガンといってもよい。加えて、「文学的精神」を具備する「児童」に向けられた「純粋童話」が存立する背後には、その指導性とともに曖昧模糊とした文学という美学化された概念が胚胎していることを前もって指摘しておきたい。

二、文学の「純粋」性と「特殊」性

詩壇では相応に評価され故郷では名門女学校の教師でもあった人物が児童文学雑誌を主宰する。その創刊の辞ともいえる「編輯後記」では、既成のジャーナリズムや国語読本そしてプロレタリア童話を標的に掲げてはばからない。そんな佐藤一英の行動に窺える思想的背景を、ここではひとまず彼の文章において多用される「詩」という語に含有される「純粋」性に則して考えてみたい。一九三一年六月に発表した「純粋文学とジャアナリズム」と題されるエッセイにおいて佐藤は、貴司山治と堀辰雄を具体例にとり、それぞれの作品を「ジャアナリズム小説と非ジャアナリズム小説」とに「区別」している。この分類の準拠枠となっているのが「詩」的属性の有無である。このエッセイで使用される文芸ジャンルのパラダイムは、「大衆文学」「プロレタリヤ文学」対「純粋小説」であるのだ。はたして「ジャアナリズム小説と非ジャアナリズム小説」という分類枠は、無条件に「〈詩（ポエジィ）〉のない小説と〈詩（ポエジィ）〉のある小説」に変換される結果となる。[*8] 前節ですでに指摘したとおり、小説ジャンルにしてみても強調されるのはこの「詩」的属性、つまり文学の「純粋」性なのである。

新らしい文化機関が発明され、それが発達するにつれて、文

学にまでその影響が及ぶといふことは否まれないが、それが文学の全貌を変へてしまふといふこともあり得ない。文学は他の文化機関の影響を蒙りつつ、また特殊の発達をするものであるからである。それは近代ジャアナリズムのすばらしい発展が一方にあるに拘らず、文学がその或る部面に於ては文学の純粋を保つばかりでなく、それ自分の特殊の発展を遂げてゐることを見れば了解されることである。私はいまその一端に触れてみたのに過ぎない。[*9]

龍胆寺雄の造語「人絹文学」なる語を借りて、当時文壇を席巻していたプロレタリア文学を「ジャアナリズム的印刷技術の支配下にある文学」とし、「非ジャアナリズム的印刷術の優れた要素を持つた」代表的な事例として「キュビズムの文学」や「形式主義（フォルマリズム）の詩」を挙げる佐藤が、阿部知二の文章を引用しそれを「卓見」と評していることからすれば、このエッセイは確固とした歴史的な文脈を胚胎しているといえよう。[*10] つまり、佐藤一英の文学観は、この翌年夏頃から『新潮』誌上をはじめとする文芸ジャーナリズムにおける「純文学の危機」といったテーマの流行から、「文芸復興期」始発の一九三三年に生産された文学言説に特徴的なある性格を兼ね備えているからである。端的にいえば、それは文学主義である。だから、「文学的に感覚が洗練され、情緒豊かな、且つ教養の深い読者」を推奨し、多数性において優る「大衆」は「文学の糟で満足する」読者として、「文学的教養」を有する少数の読者と厳然と区別されてもいるのである。[*11]

ここで暗黙裡に主張されているのは、とりあえず「文学」の普遍性であるのだが、佐藤は、その「詩」的属性もしくは「純粋」性を冠された「文学」存立の論拠を、その「特殊」性に委ねている。もちろんそこには、「特殊」性を普遍性へと転用する論理的矛盾が介在するのだが、その矛盾は、「文学の純粋」性への絶対的な信奉によって解消されてしまうことになる。それは、「文学は他の文化機関の影響を蒙りつつ、また特殊の発達をする」という記述から明らかとなろう。このようにみれば、佐藤一英が『児童文学』を大衆児童文学や国語読本そしてプロレタリア児童文学への「軽蔑」から始めている事実は、しごく当然であるように思われる。それは、詩・小説・童話という相異なる文芸ジャンルそれぞれを対象とするに際しても、ほとんど変わることのない「文学の純粋」性を奉じる立場から論じられているからである。だが、その「文学の純粋」性なるものを前提にして紐解かれる——保守的な——文学主義的なスタンスに対しては、やはりその立場がはらむ危険性を指摘しなければならない。

佐藤一英の純粋志向の文学言説は、既成の文芸各派諸分野に対して批判的な言辞を投げかけることを特徴としている。つまり、佐藤のいう「文学」への帰属意識はそれ自体、小説なら小説、児童文学なら児童文学の、それまでの文芸ジャンルの既成諸分野に異議を申し立てることを前提としているのだ。しかしそれは、彼みずから奉じる「文学の純粋」性という観念についても同様である。本稿の文脈に則していえば、この観念は、それに依拠する佐藤自身があるべき理想に向かって従来の児童文

学像を変革しようとする試みに応じて、「純粋童話」という戦略的なスローガンとなって新たに提唱されていることになる。だが、その「純粋」性をもって「文学」の普遍性を奉じる佐藤は、理想に則して変型された児童文学像を発話するその行為によって、その普遍性を一個人の文学観として提出していることになるのだ。そして、この矛盾をも取り込んだ彼の文学言説は、前掲の『児童文学』創刊号「編輯後記」の事例のごとく、併せて排他的な性格をも胚胎しているといえる。もちろんこの謂は、言説構造からみたレトリックにとどまるのだが、こういった検討が必要と思われるのは、やがて佐藤一英の文学言説が国粋主義的な色彩を帯びてゆくからである。以下に挙げるのは、「詩の復興　新らしい詩の精神」と題される文章の結びの部分である。

要するに詩の復興といふことが多少ともありとすれば、内容形式ともに欧米詩の模倣のみに終始してゐた観のある、日本の近代詩が没落し、真に日本的な――それこそ韻律から用語までも日本的な、根拠の深い詩が出はじめたといふことにあつて、詩の雑誌が一冊や二冊創刊されたといふことにはないのである。[*12]

一九三四年九月に発表されたこの時評的なエッセイで注目すべきなのは、「欧米詩の模倣」に「終始」した「近代詩」を「没落」と価値づける一方、それにとって代わる「真に日本的な」詩が制作されることが「詩の復興」なのだとする佐藤の論理である。このエッセイには「純粋」という語こそ登場しないものの、「真に日本的な」「根拠の深い詩」といった表現がその語を代行しているとも解釈できよう。つまり、「文学の純粋」性は、一詩人の文学観として「真に日本的な」という指示内容の政治性を付加されているのである。

「詩の復興」を「詩語の自覚」にあるとする佐藤は、それが「日常口語」から「文章語」「古語」へと移行しつつある傾向を指摘し、「文章語、詩語として、洗練をかさねてきた平安朝語がとりあげられるのはけだし当然である」と書いている。そして、「平安朝語」という「美しい韻律をひゞかせる言語」を採用していくべきメディアは、「ラヂオの詩の朗読放送」であるという。それは、「ラヂオで詩の朗読が放送されるやうになつた」のが、「新雑誌が二つ三つ出たことよりも詩の復興の名にはふさはしいかも知れぬ」からである。当時最先端のメディアであったラジオ放送と「真に日本的な」「平安朝語」で綴られた詩。もちろんこの二項を媒介するのは、「国民大衆の興味」なのである。

三、愛国詩人へ

詩もしくは文学がかく純粋であらねばならぬとする文学観が、やがて詩歌の伝統の永続性から日本文化の特殊性を主張する文化主義的立場へと紐解かれていくプロセスは、ある意味では一九三〇年代の文学言説の典型的な事例にあてはまるともいえよう。しかし、それを今日のやや稀薄な著名性から考慮して、佐藤一英という人物をたんに同時代的な状況を悲憤慷慨した詩人とするのはやや早計である。佐藤には『新韻律詩論』をはじめとする詩集や詩論それに詩史に関する著作もあり、そこでは独

自な視点による緻密な理論や近代詩の展開が論じられているからである。[*13] これまで問題にしてきたのは、そのような人物が、「平安朝語」の称揚といった過去へ憧憬をはらみながら「日本」主義的な詩作へと向かうその実践を、文学言説によって正当化する思考の論理的清算の仕方であるのだ。本稿では、そのキーワードとして児童文学という異なる文芸ジャンルへの参入に際し唱えられた「純粋童話」のスローガン、そして「純粋」なる語に注目し、後に「純粋」という語に「日本」的なる意味内容が付与されることを考察してきたわけである。

その佐藤一英の代表作といわれるのは、一九三三年に発表された長詩「大和し美し」である。[*14] 表題は、「大和は国のまほろばたゝなづく青垣山隠れる大和し美し」という『古事記』に倭建命辞世の歌と伝えられる結びの句からとられている。以下に引用するのは、その結びの連である。

あゝ倭　お身の名を再び呼べばわが目にはふるさとの空晴れ渡り　山々は肌も露はに現はるゝ／そはわが子いかに見悪くからむも　そをはぐくまむこゝろには人目もあらず胸をはだける母をさながら光浴びたり[*15]

故郷にある熱田神宮に祀られた倭建命への畏敬の念は、その少年時代からの所産であろうか。この長詩には、「あゝ倭」と吟じる詩人によって倭建命の最期が抒情豊かに綴られてはいる。だが、まさにそうであることから、日本神話の英雄的人物に語りかけるその手法には同時代性は介在しない。そこに窺えるのは、詩人の想像的世界と神話的世界との一体化にほかならないからだ。引用部では、「あゝ倭」とその名をひとたび口にすれば直ちに「ふるさと」の情景が想起され、且つそれは、「母をさながら光浴びたり」とする比喩との対応により、「倭建命」の形象を補完している。その詩情の背後にあるのは、「倭建命」という神話的人物を詩において表象することに対する佐藤の自負にほかならない。この詩こそ彼のいう「真に日本的な」詩の典範に値するものともいえるだろう。

詩語の彫琢を第一とするこのような詩作が、他方において次第に国粋主義的なイデオロギーを帯同するにいたるのは、むしろ当然の帰結なのかもしれない。たとえば、やや時代は経るものの、戦時下における佐藤の作に「雪降れり」と題される詩があるのだが、[*16] そこでは「大東亜戦争」が「聖戦」と表記され、ある日の「雪」の情景をして南方や大陸の戦地でさえも「聖戦の艦」や「聖戦の車」に等しく雪が降り注ぐ様が綴られている。はたしてその「雪」は、さも「明治の御代の大君の、歌ひ給ひし言の葉」のように「民一億の身を浄め、心を高め」るのである。その「御声」は「国の肇めの神祖」の「御声」となり、「いくちとせこむわが子孫」にわたる「「海山ゆきて大君の辺にこそ死なめ」の誓ひ」となる。「雪はそそげり」の句とともに反復して記される「また美しく、またかぐはしき朝」とは、「大東亜戦争に賜りたる宣戦の詔書」に記される「昭和十六年十二月八日」より「はや七日経」た日であるのだ。

この詩が掲載された『大東亜戦争愛国詩集』の後記によれば、大政翼賛会文化部は、太平洋戦争開戦に際しラジオの音声をも

って国民に聴かせる詩を募集した旨が記され、実際そのなかの若干の詩は、「直ちにラジオを通じて放送され、音盤に吹き込まれ、劇場で朗読された」[17]とある。佐藤の詩がそれに加えられたか否かについては不明であるが、前節で触れたラジオの朗読放送が「詩の復興」に値するという佐藤の言葉は、そのみずからの詩が国民の戦意高揚を目的としたプロパガンダ文学の「献納詩」となることで実現されるにいたるのである。

また美しく、またかぐはしき朝かな。／聖戦のいはれを知らぬ
幼な児も赤き手を振り、その子らをいのち捨てよとおくりたる翁、媼も／ほほ笑めり、／雪はそそげり。[18]

「大和し美し」では、「倭建命」という神話的人物とそれを詠じる詩人との距離がほとんどないまでに描かれていた。しかしそれ以上に、この「雪は降れり」と題される一篇では、「国の肇めの神祖」から永続的に継承される天皇の「御声」が、戦地に徴兵される兵士を見送る「幼な児」や「翁、媼」にまで違和なく投影されている。それが詩集の制作の意図であるにすぎないものの、「この雪にして、大祖と、われらが胸はつながれむ」とする箇所からすれば、「大祖」の存在を前提にして「幼な児」や「翁、媼」までが画一的に活写されていることが窺えるだろう。それを純粋な抒情と一括するもよいとはいえ、出征する息子を「いのち捨てよ」と「ほほ笑」みながら見送る「翁、媼」の姿なるものがきわめて想像しがたいのもまた事実である。この国民すべてを均質な広がりをもって包摂する暴力的なまでの「聖戦」イデオロギーは、韻律の技術の問題に帰するというよりも、「ラジオ」「音盤」「劇場」といったメディアを媒介にして国民の戦意高揚を奮起することを目的とするプロパガンダに則した、徹底したわかりやすさをもって構成されている点に注目すればよいだろう。

四、「国語的純粋化」と「地方主義」

これまでみてきたのは、佐藤一英という詩人が一九三一年に唱えた「純粋童話」のスローガンから、戦時下におけるプロパガンダ詩制作までの一連の経緯であった。そこで明らかとなったのは、「文学の純粋」性に基づき「純粋童話」を掲げていた時点の佐藤の文学観には、やがて国粋主義的なイデオロギーに抵触する可能性がすでに胚胎されていた、ということである。そこでいま一度考えてみたいのは、『児童文学』主宰以降の文学言説である。時評風に書かれたエッセイが多いものの、この時期に残されている文章には、「文学の純粋」性に即した文学観に「日本」主義的な思想が付加されるにいたる過渡的様相が、果然確認できるからだ。まずとりあげてみたいのは、一九三五年に書かれた「現代日本詩の欠陥」という文章の一節である。

日本詩歌は今日までのところ、決して韻律的に高度なものであるとはいはれないが、このやうに国語的純粋化のあるところ必ず韻律的進歩があり、韻律的進歩があるところ必ず国語的純粋化が行はれてゐる。[19]

この一文の前半部の詩壇に対する不満は、別段では同時代の

フォルマリストを中心とした日本のモダニズム詩理論の輸入に対する痛烈な批判となっている。彼らは「詩を文学として取り込んだきりで芸術として受け継がなかつた」[*20]と評されている。その「文学」とは散文という意味合いで用いられているといってよいだろう。佐藤によれば、「韻律構成の高度を求めるに怠惰であつたことが国語を不純のまゝに放擲し、ひいては、自らの韻律の低度を国語の罪に帰してゐた」[*21]とされているからである。しかし、ここで注目したいのは、その文学言説を支えている論理である。引用において明確に規定されているように、佐藤の論理は、「国語的純粋化」と「韻律的進歩」のまどうことなき一体関係によって執行されているのだ。

「韻律的進歩」に附合する「国語的純粋化」とは、いわば詩を書く技術の産物である。そこには、「純粋」なる語の意味内容が独自に解釈されて使用されているといえよう。すなわち、「経験に先行する」とされる「純粋」性を個々の「経験」に委ねて人工的に構築することが「国語的純粋化」ということである。この論理を敷衍して考えるならば、佐藤のいう「純粋童話」もしくは「文学の純粋」性もまた、詩的言語のテクニックの彫琢のなせる業といってもよいだろう。そして、ここには奇妙な図式が介在する。この時期すでに発表されていた代表作「大和し美し」は、倭建命辞世の歌を叙事的に綴るという内容であったのだ。つまり、佐藤一英における詩の理論とその実践が、「韻律的進歩」と「国語的純粋化」の関係の絶対化に基づいて詩語の人工的彫琢を前提とする傍ら、そこに織り込まれる詩的内容は、倭建命の詩的形象化という過去の歴史を参照するという具体的な方向性を示しているのである。「国語的純粋化」に適する素材を古典に求めるこのパースペクティヴが、神話的世界による同時代的歴史性の抹消という契機をはらんでいるのは、前述したとおりである。

それとともに、佐藤一英の文学観には、もうひとつの方向性が介在することになる。次に挙げるのは、前掲引用文の二ヶ月後に発表された「現代詩の諸問題」と題される文章の一部である。

> プロレタリヤのあるものがすでに行動主義的であることはかつて国民新聞紙上でも指摘しておいたが、マルキストが唯一絶対の尺度にしてゐた階級といふものが、実はそれほどのものではなく、同郷人とか同国民とかいふ尺度が今まで考へられてゐた程、弱い限界性ではないことを詩人や文学者が漸次に自覚しつゝあるが、一国内の文学者にあつては、この地方的限界性といふものが、秩序の最も強度な且つまた最も深度なものであることはあまり知られてゐないやうである。[*22]

このエッセイが、日本におけるプロレタリア文学運動破綻の後に書かれていることは、さしあたり重要だろう。それは、プロレタリア文学全盛の時代、佐藤は、「大衆」に類する概念を著しく嫌悪していたからである。ここではそれは、「大衆」を措定するといってもよい「階級」という語になっている。そこで注目したいのは、一九三四年に繰り広げられた行動主義論争とプロレタリア文学運動との共通点を示唆する一方で、佐藤が、マ

ルクス主義的な「階級」という概念に対して、「同郷人」「同国民」という「尺度」を提出していることである。詩的内容の神話的素材への参照が歴史の縦軸を構成するラインであるのなら、その「同郷人」もしくは「同国民」とは、いわば同時代の地理的な横軸の線引きであると称しても差し支えないであろう。

一戸謙三の津軽方言詩に興味を示した佐藤一英の「郷土語」への関心は、「同郷人でなくては触れ得ない」「生活なり観念なり」の「最深の秩序」がその地方の言葉で表現されることによって、そこに「行動主義」の「認識の限界性」などの諸問題を打開する可能性を見出している。その思考方法は、詩壇モダニズム派の西洋志向に対する佐藤の一種のネイティヴィズムへの立脚であるともいえよう。佐藤の「郷土語」による詩作の有無は確認できなかったが、この文章では、「人為語たる共同語に対して地方語はその環境と密接であり、その効果は絶対的である」という一戸謙三の言葉を引用して、地方語が標準語の対向として想定されていることを語らせている。もとより佐藤自身の故郷への愛着は、熱田神宮に祀られた倭建命の畏敬の念をはじめとして多大なるものがある。しかし、地方語に依拠した詩に新たな可能性をみるのであれば、詳細に論じられるべきは標準語との関係性であろう。だが、彼が力説するのは、地方語とその地方で生活する人々との不可分な関係でしかない。にもかかわらず佐藤は、「地方主義が国民主義に発展する妥当性がうかゞはれる」と書いているのだ。[*23]

マルクス主義的な「階級」という概念と、「同郷人」「同国人」という語の対置。加えて「同郷人」「同国人」と並列された語と、方言と標準語との照応関係。こうした参照枠の是非が問われていないのは、偏に「地方主義が国民主義に発展する妥当性」を講じる諸問題の清算方法に由来している。そこに認められるのは、地方語によってその地方を等質に代表する、もしくは、「国語的純粋化」を経た日本語が等質に「国民」を代表するといった、「真なる韻文精神」[*24]への信奉なのである。ここに、「階級」という概念に付随する不可避的なヘゲモニー闘争の構図が介在する余地はない。だから、佐藤のいう「地方主義」は、あらゆる矛盾を無化して「国民主義」へと転じるのである。換言すればそれは、地方文学の偏在的多様性と国民文学への褶曲的均質性という相反する文化的な方向性が、「日本」主義というネイティヴィズムによって調停されるプロセスを物語っているといえよう。

むすび

本稿で論じてきたのは、佐藤一英の「純粋童話」の提唱からプロパガンダ詩制作に見受けられるひとつのプロセスである。「純粋」であることを国語の彫琢という経験的技術に求め、さながらそこに日本主義的なイデオロギーを胚胎させていった佐藤の文学言説を支えていたのは、日本志向の文学主義といえよう。それがおもに一九三〇年代の同時代性と切り離しえないと思われるのは、佐藤の文学言説の対象が、詩の領域にとどまらず、小説や児童文学にまで及んでいるからである。特にその分岐点として着目したのは、一九三一年の雑誌『児童文学』の主宰であるのだ。「児童」が「文学精神」を有するという主張は今

日充分に注目に値する議論ではあるものの、この時期を中心にした佐藤の文学言説と比較して俯瞰すれば、それとともに提唱された「純粋童話」の「純粋」なる語には、きわめて排他的な政治性が認められたのである。

それは、プロパガンダ詩「献納」へと向かう一連の経緯によって明らかとなった。それを「聖戦」イデオロギーを鼓舞する「雪降れり」と題された一詩のみにおいて判断するのは早計であるにしても、詩的内容による古典的世界の称揚と「国語的純粋化」との対応関係に示されていた歴史の縦軸の統括的要素と、同時代の方言詩への関心から言述された「地方主義」と「国民主義」の無条件の融合とに、同時代のナショナリズムと抵触せざるをえない可能性を窺うことは容易であろう。もちろんそれは、佐藤一英という古典派象徴詩人に限ったことではない。だが、問われるべきなのは、純粋志向に立脚した文学言説の論理的清算方法がはらむその危険性への自覚であるのだ。こういった個々の事例がどのように同時代性を獲得していくのかについては続稿の課題としたいのだが、文学がかく純粋でなければならないとする、いかにも無色透明であるかに思える文学言説には、必然的に暴力的な包摂作用と排他的性格が伴う危険性があることは指摘できると思われる。

注

＊1　『文芸大辞典』（文芸春秋社出版部、一九二八年）、二九三頁。

＊2　『新文学事典』（新潮社）『現代用語辞典』（玉井清文堂）『常用モダン語辞典』（好文閣）などを参照。尚、この頃になると「純文学」の項目は「大衆文学」の対として措定される場合が多く、時代を経るごとにきわめて簡潔な定義をもって済まされる傾向になる。

＊3　佐藤一英の履歴に関しては、佐藤一英著作集刊行会編『佐藤一英詩論随想集』（講談社、一九八八年）所収の佐藤蓮作製による年譜に従った。また、一九三〇年前後に佐藤は、詩や評論を発表する傍ら『児童文学』の出版元となる文芸書院より『新訳平家物語読本』や『新訳太平記物語読本』などの一般向け書籍を出してもいる。それ以降も子供向けの古典読み物を多数手掛けていることからしても、児童文学雑誌の主宰は、けして意外な仕事ではなかったと考えられよう。

＊4　佐藤一英「編輯後記」（『児童文学』第一冊、文教書院、一九三一年）、三三二頁。

＊5　関口安義「雑誌『児童文学』について」（『雑誌『児童文学』復刻版別冊』所収、アリス館、一九八四年）、一三頁。

＊6　一九一八（大七）年から「さくら読本」が登場する一九三三（昭八）年までの国定国語読本「白読本」には、『赤い鳥』に代表される童話は掲載されてはいない。しかし、当時の小学校の国語教材には、この国定教科書とともに時代に合わせた独自の副読本を編んで使用する場合が多かったという。それらの教材に『赤い鳥』系の童話や童謡などが多く含まれていた。この時代までの児童文学は、『赤い鳥』『金の船』に代表される大正期からプロレタリア児童文学運動や生活綴方運動、また一方では、講談社系の商業雑誌の「おもしろくて、ためになる」をモットーにした大衆児童文学という流れを一応の目安にすることができる。だとすれば、本文引用において佐藤がいうのは、これら双方を総括したものと考えてもよいと思われる。

＊7　前掲、佐藤一英「編輯後記」三三二頁。

＊8　佐藤一英「純粋文学とジャアナリズム」（『詩と試論』第12冊、厚生閣書店、一九三〇年九月）、二七～二八頁）。

＊9　前掲、佐藤一英「純粋文学とジャアナリズム」二八頁。

＊10　龍胆寺雄「人絹文学礼賛」（読売新聞、一九三〇年十二月一七日）によるものと思われる。「人絹」とは「人造絹糸」の略。阿部知二の引用は「新文学の精神」（『詩と詩論』第十冊）に依る。また「文芸復興期」をめぐ

る文学言説については、拙稿「一九三三年における「文芸復興」のスローガンについて」（『文学研究論集』第十五号、筑波大学比較・理論文学会、一九九八年）を参照されたい。

＊11　前掲、佐藤一英「純粋文学とジャアナリズム」二七頁。

＊12　佐藤一英「詩の復興　新らしい詩の精神」（佐藤一英著作集刊行会編『佐藤一英詩論随想集』、講談社、一九八八年、五一頁）、初出は「都新聞」（一九三四年九月）。この文章は、『椎の木』『麺麭』『詩精神』などの既成雑誌に加えて、新たに『詩法』『日本詩』の二誌が創刊された誌壇の状況に対する時評として記されている。

＊13　『新韻律詩論』にいたる佐藤一英の詩論とその同時代的動向については、米倉巌氏の「佐藤一英の新韻律詩論」（『日本大学芸術学部紀要』、一九九五年）がある。

＊14　「大和し美し」は『新詩論』第二冊（アトリエ社、一九三三年）に発表の長詩、前掲の年譜によると、同年同出版社より刊行もされている。尚、後年の児童向けの佐藤の著作『日本武尊物語』（大日本雄弁会講談社、一九五八年）には、「この本を読む少年少女へ」という前書きにおいて「わたしはいまでも、どうかすると、「大和し美し」の詩人だといわれています」とある。この長詩はまた、『児童文学』に挿絵を提供した棟方志功がこの詩に共感し、後に版画で佐藤の詩をも取り入れて完成した同名作によっても知られている。

＊15　前掲、佐藤一英「大和し美し」四四頁、尚、本文引用は改行等も含め、佐藤一英著作集刊行会『佐藤一英詩集』（講談社、一九八八年）一〇一頁に依った。初出詩とは、読点が空欄に改められるなど若干の異同がある。

＊16　佐藤一英「雪降れり」（大政翼賛会文化部編『大東亜戦争　愛国詩集（1）詩歌翼賛特集』、目黒書店、一九四二年）、一二頁。

＊17　大政翼賛会文化部「跋」（大政翼賛会文化部編『大東亜戦争　愛国詩集（1）詩歌翼賛特集』、目黒書店、一九四二年）、五一～五二頁。

＊18　前掲、佐藤一英「雪降れり」一一頁。

＊19　佐藤一英「現代日本詩の欠陥」（佐藤一英著作集刊行会編『佐藤一英詩論随想集』、講談社、一九八八年、七九頁）、初出は「羅曼」（一九三五年三月）。

＊20　前掲、佐藤一英「現代日本詩の欠陥」七八頁。

＊21　前掲、佐藤一英「現代日本詩の欠陥」八〇頁。

＊22　佐藤一英「現代詩の諸問題」（佐藤一英著作集刊行会編『佐藤一英詩論随想集』、講談社、一九八八年、九六頁）、初出は「羅曼」（一九三五年五月）。

＊23　前掲、佐藤一英「現代詩の諸問題」九六頁。

＊24　この言葉は、前掲の佐藤一英「現代日本詩の欠陥」より抜粋。

（なかね　たかゆき　　筑波大学大学院　博士課程　文芸・言語研究科　文学）